

# ラーニングコモンズにおける学生スタッフの 社会人基礎力と学びの志向性 － 課外活動経験が及ぼす影響の検討－

山 田 貴 子

“Fundamental Competencies for Working Persons” and  
Learning Preferences of Student Staff in the Learning Commons:  
A Study of the Influence of Students’ Extracurricular Activities

Takako YAMADA

## 要 旨

高等教育のアウトカム重視傾向の高まりから、汎用的能力獲得における正課外の学習活動が果たす役割に注目が集まっている。そこで本研究では、ラーニングコモンズの活動に焦点をあて、学生スタッフの社会人基礎力<sup>1)</sup>への影響を検討することを目的とした。

研究1では、学生スタッフの社会人基礎力に与える影響のうち、課外活動経験に注目し、学生スタッフ46名の社会人基礎力得点と、①アルバイト、②サークル活動（部活動を含む）、③教職課程履修、④SA経験、⑤一人暮らし経験の5つの課外活動経験の有無との関連を検討した結果、すべての項目に関して有意差は認められなかった。

研究2では、学生スタッフ44名を対象にラーニングコモンズでの活動に関するアンケート調査を事前・事後の2回に分けて実施した。その結果、向上させたい力として【発信力】【働きかけ力】【主体性】を重要視する学生が多く、対人関係における社会的成長および人格的成長への志向性が確認できた。以上のことから、ラーニングコモンズにおける正課外活動実践は、社会人基礎力の発揮・向上の場となり得ることが示唆された。

キーワード：社会人基礎力、ラーニングコモンズ、学生スタッフ、正課外活動、志向性

## 問 題 と 目 的

### 1. 大学生に期待される汎用的能力

Martin Trow (1976)<sup>2)</sup>が「高等教育のユニバーサル化」を指摘し、「多彩な学生への対応」に警鐘を鳴らしてから40年が経過した。大学・短期大学の進学率（過年度卒含む）は57.3%となり、専門学校を加えた高等教育全体の進学率は80%を超え、過去最高を記録している<sup>3)</sup>。1992年には205万人だった18歳人口も、2009年には121万人にまで減少し、2024年には110万人を割るとの予測<sup>4)</sup>もある。こうした危機的状況を受け、各大学では、入試制度の見直しや国際系、看護・

健康福祉等の実学系、産業界が求める人材養成系等の新学科創設、地元企業との連携など、それぞれの規模や歴史、地域性といった諸環境を資源に急速な改革が進められている。

大学改革の視点は、自校の強みや特色の明確化、組織・経営の強化といった側面だけではない。1990年代以降から始まった産業界からの人材教育要請は、大学教育の質的向上および学修成果の可視化といった「社会に対する説明責任」となって各大学に重くのしかかっている。大学は、4年間の学士課程教育を通じて、学生がどのような力を身につけ、どのような成長を遂げたといえるのかを明らかにしなければならなくなったのである。

大学生が身につけておくべき汎用的能力に関する議論は、2000年代に入ってさらに過熱し、さまざまな提言がなされてきた。具体的には「社会人基礎力」（経済産業省）、「学士力」（文部科学省）、「キー・コンピテンシー」（OECD）などであり、初等中等教育を対象とした「学力の三要素」（学校教育法）、「21世紀型能力」（国立教育政策研究所）や、職業教育を対象とした「エンプロイヤビリティ（雇用されうる能力）」（日本経営者団体連盟）、一般的なスキルとしての「人間力」（内閣府）、「基礎力・汎用的能力」（文部科学省）を含めると、実に膨大であることがわかる（表1）。松下（2010）<sup>5)</sup>は、これらを〈新しい能力〉と名付け、①対人関係調整の能力や人格特性・態度なども含む人間の全体的な能力に及ぶこと、②教育目標や評価内容として教育の過程の中に深く入り込んでいることを特徴として挙げている。

表1 基礎的・汎用的能力に関する主な提言の変遷

	人間力	社会人基礎力	学士力	基礎的・汎用的能力
提言	2003 内閣府	2006 経済産業省	2008 文部科学省・中央教育審議会	2011 文部科学省・中央教育審議会
趣旨	社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な能力	職場や地球社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力	学士課程で育成する21世紀型市民の内容（日本の大学が授与する学士が保証する能力内容）	分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力
内容	知的能力の要素 基礎学力 専門的な知識・ノウハウ 論理的思考力 創造力	前に進み出す力【アクション】 主体性 働きかけ力 実行力	知識・理解 他文化・異文化に関する知識の理解 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解	人間関係形成・社会形成能力 他者の個性を理解する力 他者に働きかける力 コミュニケーション・スキル など
	社会・対人関係力の要素 コミュニケーションスキル リーダーシップ 公共心 規範意識 相互啓発力	考え抜く力【シンキング】 課題発見力 計画力 創造力	汎用的技能 コミュニケーション・スキル 数量的スキル 情報リテラシー 論理的思考力 問題解決力	自己理解・自己管理能力 自己の役割理の理解 前向きに考える力 自己の動機付け など
	自己制約の要素 意欲 忍耐力 自己受容・自己実現力	チームで働く力【チームワーク】 発信力 協働力 柔軟性 状況把握力 規律性 ストレスコントロール力	態度・意向性 自己管理力 チームワーク、リーダーシップ 倫理観 市民としての社会的責任 生涯学習力	課題対応能力 情報の理解・選択・処理等 本質の理解 原因の追究 など キャリアプランニング能力 多様性の理解 将来設計 など
			総合的な学習経験と創造的思考力	

こうした〈新しい能力〉に関わる概念は、これまでの知識重視への反省が起点となっているが、能力重視偏重によって知識の重要性がおろそかにされているのではないかと懸念は依然としてあり、批判的な見方もある。たとえば、私立大学連盟は、教育がその時代の社会や国家に直ちに役に立つ目的で設計されてよいものなのかという疑問を呈し、時代の変化に応じた知性を発揮できる能力および目標に向かって創造性を発揮する能力の育成こそが大学教育に関わっている（日本私立大学連盟、2015）<sup>6)</sup>と提言している。

しかしながら、こうした議論の発端となっているのは、産業界と教育界の対立構図ではなく、大学教育の目的のひとつであった「社会人として必要な一般的知識やものの見方・考え方の獲得の実現」が揺らいできている現実には他ならない。半数以上の高校生が面接や推薦で入学したのち、ゆるやかなカリキュラムのもとで学び、学びの集大成であるはずの卒業論文も書かずに社会に出ていくといった現状が少なからず全国各地でおこっている。採用する企業も学生の能力を推し量ることが難しく、学士力に対する社会からの信頼は弱い状況にある。大学卒業時点での能力

を保証する仕組みと、その能力を育成する大学独自のカリキュラム開発が求められていると同時に、大学生の汎用的能力の獲得において、正課外における学習活動が果たす役割は、ますます高まってくると考えられる。

## 2. 正課外で学ぶ可能性

大学教育の質保証の観点から、「何を教えるか」ではなく、「何ができるようになるか」といった学生の学習成果や〈新しい能力〉とされる汎用的能力の育成が注目されている。たとえば、社会人基礎力に関する先行研究では、その性質から正課教育、とりわけキャリア教育との関連を検討したものが多く、汎用的能力の獲得は正課教育の枠にとどまるものではなく、正課外活動を含めたトータルな学びの中で得られるものである（溝上、2009；山田・森、2010）<sup>7)</sup>。実際、大学生は正課での学びだけではなく、部活動・サークル活動を始めとする学生生活やアルバイト、長期休業期間における短期留学や旅行など、さまざまな経験を積む。また、ボランティアを通じて社会に貢献する活動も少しずつ定着してきている（山田・井上、2009）<sup>8)</sup>。こうした正課外活動は、適性・興味関心やキャリア意識、時間の使い方など学びの志向性に基づき、学生自身が自主的に選択し取り組んでいるものである。そこでは、自発性・主体性といった正課外の特徴と、ともに活動する仲間との学び合いから得られる互恵性・対等性といった特質が重なることで、社会人として求められる汎用的能力の獲得をより円滑にしている。

## 3. ラーニングコモンズの活動と社会人基礎力との関連

我が国では、情報化の急速な発展と社会から求められるニーズの変化、教育観の転換にともなうアクティブラーニングの推進を背景として、2000年代からラーニングコモンズの設置が急速に進み、特に2000年代後半以降、顕著な増加を示すようになった。現在、ラーニングコモンズを含むアクティブ・ラーニング・スペースは、512大学（全体の65.4%）に設置され、この5年間で2倍に急増している（文部科学省、2018）<sup>9)</sup>。

ラーニングコモンズは学科や学年の違う学生が集い、学び合う学習空間である。そこでは多様な知識に触れることで自ら課題を発見し、広い視野で物事を判断し、それを積極的に発信する力を伸ばすことが重要になってくる。また、チームでの活動を推進していくうえでは、対人的なネットワークを構築する中で仲間の意見に積極的に耳を傾け、問題を把握し、協力しながら実行に移していく力も求められる。

私立A女子大学のラーニングコモンズは、こうした社会人基礎力を前提に「Be Active！（うごく）」「Be Collaborative！（つながる）」「Be Creative！（つくりだす）」の3つの能力を伸ばしていくことをコンセプトとし、7つの出会い（Students、Teachers、Media、Books、Sports、Business、Art&Music）による創発から、学科横断的に自由な発想でグループ学習に取り組む正課外活動を推奨している。

学生スタッフは全員が公募で自主的に集まった学生であり、半年間の任期制で①ラーニングコモンズ受付業務と②チーム自主企画の2つの業務に従事している。①は、施設予約の受付（台帳、デジタルサイネージ管理など）、ICT機器の貸出、使用法の説明、問合せ等の対応、学習環境の整備などで、平日の午後15～3時間程度を2名体制で担当している。②では、前述した7つの出会いを創出するため、全員が各領域を担当するA～Eの5つのチーム（各チーム10名程度）いずれかに所属し、週1～2回の活動を基本にさまざまな自主企画を実施している（表2）。

表2 ラーニングコモンズ学生スタッフのチーム構成

構成員	担当領域	具体的な取組内容
チームA	9名 学生・教員・ビジネス	学内プレゼン大会、プロフェッサートーク企画、OGフォーラム、学友会連携など
チームB	10名 文学・学問・展示	ブックシェルフコーナーの運営、図書館連携、ワークショップの開催、展示・催物企画など
チームC	9名 芸術・音楽・スポーツ	美術館ツアー企画、キャンパスコンサート、地元スポーツの応援・観戦企画など
チームD	11名 英語・グローバル	英語カフェのPR、留学体験報告会の開催、各種イベント企画など
チームE	11名 メディア・広報・社会	LC通信、SNSによる広報宣伝、パンフレット・ポスター作成、キャンパスツアーガイドなど

こうしたラーニングコモンズの学生スタッフに求められる力は、単なる基礎的知識や態度にとどまらず、大学生活をより充実したものにすることや、大学卒業後、社会に出たときに役立つ汎用的能力である。その意味で、社会人基礎力は、「意欲をもち、自ら考え、他者と協同する」というきわめて当然の力でありながら、今後、社会がどのように変化しようとも生涯学び続ける人材を育成するうえで普遍的な能力であるといえよう。

社会人基礎力の育成には、①与えられた役割をこなすことで承認される経験をさせること、②思考を深める問題解決過程を経験させること、③一つの目標に向かってメンバーと協働させること、④①～③の活動をふまえたうえで「価値付け」と「振り返り」を行うこと、⑤活動の最後だけでなく途中段階で④を入れ定着化を図ることの5つのステップが示されている（経済産業省・河合塾、2010）<sup>10)</sup>。ラーニングコモンズにおける学生スタッフの活動は、まさにこの5つのステップをふまえながら展開しているものである。

#### 4. 先行研究との関連

先行研究（山田・金山、2017）<sup>11)</sup>において、大学生89名（ラーニングコモンズの学生スタッフ46名、一般学生43名、平均年齢19.48歳、 $SD=1.09$ ）を対象に、社会人基礎力を比較検討するため、対応のないt検定を行った（表3）。

表3 学生スタッフと一般学生の社会人基礎力の平均値・SD・t検定

		一般学生		学生スタッフ		t 値	
		n = 43	n = 46	n = 43	n = 46		
アクション	1 主体性	M	11.81	M	13.20	2.660 **	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.34)	SD	(2.54)		
	2 働きかけ力	M	11.28	M	12.96	2.836 **	一般学生<学生スタッフ
		SD	(3.06)	SD	(2.51)		
	3 実行力	M	12.00	M	14.24	4.243 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.67)	SD	(2.30)		
シンキング	4 課題発見力	M	11.53	M	13.50	3.551 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.47)	SD	(2.73)		
	5 計画力	M	10.86	M	12.70	3.463 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.63)	SD	(2.37)		
	6 創造力	M	10.21	M	12.96	4.824 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.83)	SD	(2.54)		
チームワーク	7 発信力	M	11.70	M	13.30	3.306 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.34)	SD	(2.25)		
	8 傾聴力	M	12.84	M	14.63	3.582 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.14)	SD	(2.55)		
	9 柔軟性	M	12.51	M	14.26	3.330 ***	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.41)	SD	(2.53)		
	10 状況把握力	M	12.33	M	13.52	2.296 *	一般学生<学生スタッフ
		SD	(2.28)	SD	(2.61)		
	11 規律性	M	13.74	M	14.63	1.625 n. s.	
		SD	(2.76)	SD	(2.38)		
	12 ストレス コントロール力	M	12.26	M	13.26	1.617 n. s.	
		SD	(2.91)	SD	(2.95)		

\*\*\* $p < .001$  \*\* $p < .01$  \* $p < .05$

その結果、【主体性】( $t(87) = 2.660$ ,  $**p < .01$ )、【働きかけ力】( $t(87) = 2.863$ ,  $**p < .01$ )、【実行力】( $t(87) = 4.243$ ,  $***p < .001$ )、【課題発見力】( $t(87) = 3.551$ ,  $***p < .001$ )、【計画力】( $t(87) = 3.463$ ,  $***p < .001$ )、【創造力】( $t(87) = 4.824$ ,  $***p < .001$ )、【発信力】( $t(87) = 3.306$ ,  $***p < .001$ )、【傾聴力】( $t(87) = 3.582$ ,  $***p < .001$ )、【柔軟性】( $t(87) = 3.330$ ,  $***p < .001$ )、【状況把握力】( $t(87) = 2.296$ ,  $*p < .05$ )、【規律性】( $t(87) = 1.625$ ,  $n.s.$ )、【ストレスコントロール力】( $t(87) = 1.617$ ,  $n.s.$ )となり、ラーニングコモンズの学生スタッフ群は、一般学生群よりも【主体性】【働きかけ力】【実行力】【課題発見力】【計画力】【創造力】【発信力】【傾聴力】【柔軟性】【状況把握力】の10項目において得点が有意に高いことが示された。また、社会人基礎力の3つの下位尺度「アクション」「シンキング」「チームワーク」において、いずれも学生スタッフ群の方が有意に高いことが示された。

これらの結果から、ラーニングコモンズにおける活動が、社会人基礎力の向上に関して一定の効果をもたらすことが示唆されたと推測したが、ラーニングコモンズ以外での正課外活動の経験値も含めた検討ができておらず、その点において不十分であった。

そこで、本研究では、社会人基礎力に影響を及ぼすと考えられる課外活動経験について調査し、社会人基礎力得点に差異が認められるかを検討することを目的とする。

## 研 究 1

### 1. 研究目的

ラーニングコモンズの活動に参加している学生スタッフの社会人基礎力得点と、①アルバイト経験、②サークル活動(部活動を含む)、③教職課程履修、④SA経験、⑤一人暮らし経験の5つの課外活動経験の有無との関連を検討することを目的とする。

### 2. 研究方法

#### (1) 調査対象者

ラーニングコモンズの学生スタッフ50名のうち、回答を得た46名を対象とした(回収率92.0%)。欠損値のある回答はなく、46名を有効回答とした。有効回答者は1年次生11名、2年次生9名、3年次生22名、4年次生4名(平均年齢20.17歳、 $SD = 1.06$ )である。

#### (2) 調査時期と手続き

調査は、任期を終え、ラーニングコモンズの活動を振り返るX年12月中旬に実施し、学生スタッフ全員で行う全体ミーティング後に質問紙を配付した。

倫理的配慮として、調査対象者である学生には、研究の目的、意義、方法、アンケート回答の自由意思の尊重と、調査に協力しなくても不利益のないことの保証、調査協力が得られた学生についても、個人が特定されないような記載方式を採用し、学生の人権の保護および法令の遵守に努めること、本研究目的以外のデータ使用は行わないことなどについて文書と口頭で説明した。回収はポストへの個別投函とし、質問紙の投函をもって研究への同意を得たとみなした。

#### (3) 使用尺度と検討項目

社会人基礎力の測定には、経済産業省が公開しているレベル評価基準表およびプログレスシー

トを参考に北島ら (2011)<sup>12)</sup> が作成した「社会人基礎力尺度」を用いた。

社会人基礎力尺度は、「アクション」「シンキング」「チームワーク」の3つの能力と【主体性】【働きかけ力】【実行力】【課題発見力】【計画力】【創造力】【発信力】【傾聴力】【柔軟性】【状況把握力】【規律性】【ストレスコントロール力】の12の能力要素からなり、各能力要素に3項目を設定した合計36項目について、無記名および自己記入式の質問紙による調査を実施した。教示文は“グループやチームでの取り組みをするときの自分を思い出し、あてはまる数字に○印をつけてください。”とした。回答は「1. 全くあてはまらない」～「6. 非常にあてはまる」の6件法とし、逆転項目はなく合計得点が高いほど社会人基礎力が高いと解釈される。

さらに、社会人基礎力得点との関連を検討する項目として、①アルバイトの有無、②サークル活動（部活動を含む）の有無、③教職課程履修の有無、④SA経験の有無、⑤一人暮らし経験の有無について尋ねた（表4）。

表4 学生スタッフの課外活動経験の有無

項目	1: なし	2: あり	合計(人)	備考
アルバイト	10	36	46	2: 現在(学内外を問わず1つ以上)している
サークル活動	16	30	46	2: 現在(学内外を問わず1つ以上)所属し、活動している
教職課程の履修	35	11	46	2: 履修済もしくは履修中である
SA経験	36	10	46	2: これまでに正課授業でSAをした経験が一度でもある
一人暮らし	34	12	46	2: 現在一人暮らしをしている

①②では自らの志向性に応じて同じ志をもった集団に所属し、③④では、対人援助に関する領域を学習・体験している。また、⑤は主に個人の生活にかかわる領域ではあるが、実家暮らしの学生よりも、自ら考え、決断をする場面が圧倒的に多く、援助要請力も必要になってくる。私立A女子大学では、県外出身者が約22%（2017年度）を占めるため、入学当初から学生課および学友会を中心に、スポーツ大会や料理教室、防犯教室などの一人暮らし支援を複数回実施している。また、ラーニングコモンズの学生スタッフが主催するランチ会では、履修相談や、生活全般、対人関係、進路などに関する悩みを気軽に先輩に相談できる環境を整えている。こうした取組から、学科学年の枠を超えて誰かに相談するといった土壌が整ってきていると推測できたため、上記5領域を検討項目とした。

### 3. 結果

#### (1) アルバイトの有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

ラーニングコモンズの学生スタッフの社会人基礎力得点を算出し、①「アルバイトの有無」に関して、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った（表5）。その結果、「アクション」得点 ( $t(44) = 0.005, p = .99 \text{ n.s.}$ )、「シンキング」得点 ( $t(44) = 0.711, p = .48 \text{ n.s.}$ )、「チームワーク」得点 ( $t(44) = 0.884, p = .38 \text{ n.s.}$ )、総合計得点 ( $t(44) = 0.666, p = .50 \text{ n.s.}$ ) となり、いずれも有意差は認められなかった。

#### (2) サークル活動の有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

同様に、②「サークル活動の有無」に関して、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った（表6）。その結果、「アクション」得点 ( $t(44) = 1.034, p = .30 \text{ n.s.}$ )、「シンキング」得点 ( $t(44)$

=0.718、 $p=0.47$  *n.s.*)、「チームワーク」得点 ( $t(44) = 1.678$ 、 $p=0.10$  *n.s.*)、総合計得点 ( $t(44) = 1.384$ 、 $p=0.17$  *n.s.*) となり、いずれも有意差は認められなかった。

(3) 教職課程履修の有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

同様に、③「教職課程履修の有無」に関して、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った(表7)。その結果、「アクション」得点 ( $t(44) = 1.490$ 、 $p=0.14$  *n.s.*)、「シンキング」得点 ( $t(44) = 1.244$ 、 $p=0.22$  *n.s.*)、「チームワーク」得点 ( $t(44) = 0.670$ 、 $p=0.50$  *n.s.*)、総合計得点 ( $t(44) = 1.111$ 、 $p=0.27$  *n.s.*) となり、いずれも有意差は認められなかった。

(4) SA経験の有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

同様に、④「SA経験の有無」に関して、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った(表8)。その結果、「アクション」得点 ( $t(44) = 1.276$ 、 $p=0.20$  *n.s.*)、「シンキング」得点 ( $t(44) = 0.197$ 、 $p=0.84$  *n.s.*)、「チームワーク」得点 ( $t(44) = 0.173$ 、 $p=0.86$  *n.s.*)、総合計得点 ( $t(44) = 0.313$ 、 $p=0.75$  *n.s.*) となり、いずれも有意差は認められなかった。

(5) 一人暮らし経験の有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

同様に、⑤「一人暮らし経験の有無」に関して、有意水準5%で両側検定の*t*検定を行った(表9)。その結果、「アクション」得点 ( $t(44) = 0.578$ 、 $p=0.56$  *n.s.*)、「シンキング」得点 ( $t(44) = 0.204$ 、 $p=0.84$  *n.s.*)、「チームワーク」得点 ( $t(44) = 0.125$ 、 $p=0.90$  *n.s.*)、総合計得点 ( $t(44) = 0.174$ 、 $p=0.86$  *n.s.*) となり、いずれも有意差は認められなかった。

表5 アルバイトの有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

		アルバイト無	アルバイト有	<i>t</i> 値	有意確率
		<i>n</i> = 10	<i>n</i> = 36		
アクション	<i>M</i>	40.40	40.39	0.005	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	7.199	6.420		
シンキング	<i>M</i>	40.40	38.81	0.711	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	5.275	6.511		
チームワーク	<i>M</i>	86.70	82.75	0.884	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	8.744	13.293		
総合計	<i>M</i>	167.50	161.94	0.666	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	19.295	24.251		

表6 サークル活動の有無と社会人基礎力の平均値・SD・*t*検定

		サークル無	サークル有	<i>t</i> 値	有意確率
		<i>n</i> = 16	<i>n</i> = 30		
アクション	<i>M</i>	41.75	39.67	1.034	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	5.422	7.004		
シンキング	<i>M</i>	40.06	38.67	0.718	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	4.582	6.994		
チームワーク	<i>M</i>	87.75	81.40	1.678	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	9.015	13.589		
総合計	<i>M</i>	169.56	159.73	1.384	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	17.576	25.280		

表7 教職課程履修の有無と社会人基礎力の平均値・SD・t検定

		教職課程 無 <i>n</i> = 35	教職課程 有 <i>n</i> = 11	<i>t</i> 値	有意確率
アクション	<i>M</i>	39.60	42.91	1.490	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	6.705	5.375		
シンキング	<i>M</i>	38.51	41.18	1.244	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	6.377	5.582		
チームワーク	<i>M</i>	82.91	85.82	0.670	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	13.134	10.294		
総合計	<i>M</i>	161.03	169.91	1.111	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	24.293	18.577		

表8 SA経験の有無と社会人基礎力の平均値・SD・t検定

		SA経験 無 <i>n</i> = 36	SA経験 有 <i>n</i> = 10	<i>t</i> 値	有意確率
アクション	<i>M</i>	39.75	42.70	1.276	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	6.007	8.015		
シンキング	<i>M</i>	39.06	39.50	0.197	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	5.253	9.348		
チームワーク	<i>M</i>	83.78	83.00	0.173	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	11.392	16.492		
総合計	<i>M</i>	162.58	165.20	0.313	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	20.303	32.822		

表9 一人暮らしの有無と社会人基礎力の平均値・SD・t検定

		一人暮らし 無 <i>n</i> = 34	一人暮らし 有 <i>n</i> = 12	<i>t</i> 値	有意確率
アクション	<i>M</i>	40.06	41.33	0.578	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	5.939	8.150		
シンキング	<i>M</i>	39.26	38.83	0.204	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	5.484	8.310		
チームワーク	<i>M</i>	83.47	84.00	0.125	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	11.727	14.936		
総合計	<i>M</i>	162.79	164.17	0.174	<i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	21.196	29.129		

#### 4. 考察

ラーニングコモンズの活動に参加している学生スタッフの社会人基礎力得点と、①アルバイト経験、②サークル活動（部活動を含む）、③教職課程履修、④SA経験、⑤一人暮らし経験の5つの課外活動経験の有無との関連を検討してきたが、いずれも有意差は認められなかった。各項目においては、たとえば①アルバイト経験に関しては、職種や経験年数、②サークル活動に関しては、活動主体が個人かチームによっても差が考えられるため、より詳細な検証が必要になってくる。サンプル数などを含めていくつか課題は残るものの、これらの結果から、社会人基礎力の向上に関してラーニングコモンズでの活動が一定の効果をもたらすとした先行研究を支持する結果となった。

## 研 究 2

### 1. 研究目的

研究1により、ラーニングコモンズの活動に参加している学生スタッフの社会人基礎力の向上に、課外活動経験の差は見られないことが示唆された。そこで、研究2では学生スタッフ自身がどのような学びを求めているのか、ラーニングコモンズの活動をどのように捉えているのかを調査し、その記述内容から、どのような活動が社会人基礎力の向上に影響を与えているのかを分析することを目的とする。

### 2. 研究方法

#### (1) 調査対象者

ラーニングコモンズの学生スタッフ50名のうち、回答を得た44名を対象とした（回収率88.0%）。有効回答者は、2年次生21名、3年次生18名、4年次生5名（平均年齢19.93歳、 $SD=1.01$ ）である。

#### (2) 調査時期と手続き

調査は、活動開始前に実施した事前研修の最終日に「目標設定用紙」を配付し、半年間の活動をするうえで、社会人基礎力12の能力要素のうち、どの力を向上させたいかを尋ね、その理由も回答させた。選択の際は、自分が苦手としている領域を克服すること、あるいは得意としている領域を伸ばすことのどちらでも構わないことを説明した。

その半年後の最終ミーティングにおいて、個人の振り返りとして、目標に選択した社会人基礎力の自己評価と、どのような活動が自己の成長に役立ったかを自由記述で回答させた。自己評価に関しては、経済産業省のプログレスシートを参考に、（レベル3：力を十分に発揮できた・チームに貢献できた～レベル1：力を十分に発揮できなかった・チームに貢献できなかった）の3段階評価とした。合計得点が高いほど社会人基礎力向上に関する達成度および満足度が高いと解釈される。

### 3. 結果

#### (1) 学生が向上させたい社会人基礎力

学生スタッフに活動前のアンケートで「向上させたい力」を選択させたところ、【発信力】【働きかけ力】【主体性】が上位を占めた（表10）。領域ごとの割合では大きな差は見られなかったが、上位を占めた3要素の選択理由として、「まず何よりも重要」「苦手」「弱い」「これまでの自分を変えたい」といった表現が顕著に見受けられた。

#### (2) 自己評価および自己の成長に役立ったラーニングコモンズの活動

活動後のアンケートで、各自が設定した社会人基礎力に関する目標を振り返り、自己評価をさせたところ、どの領域もレベル2に集中した。また、その評価のもとになっている活動を想起させたところ、チームで実施した〔企画〕に関する記述が37名と多く、〔日常〕のチームミーティングや対人関係構築に関する記述は7名だった（表11）。

表10 学生スタッフが向上させたい社会人基礎力と選択理由

領域	能力要素	人数	割合	選択理由
アクション	主体性	6	38.6	将来のためにはまずこの力が必要／任せになりがちだった自分を変えたい／いつも他人を尊重してしまい、自分で考え行動する力が弱いから この力は組織で働くうえでとても重要だから／チームをよい方向にもっていけるような雰囲気づくりができるようになりたい／人に任せることができず、いつも自分でなんとかしようと思ってしまうから 行動力や実行力が不足しているから／すぐ投げ出してしまうことが多々ある／失敗を怖がらずに挑戦していける実行力を身につけたい
	働きかけ力	8		
	実行力	3		
シンキング	課題発見力	2	25.0	今の自分の課題を把握できていないので克服したい／いつも行動が受け身で何かが起きてからしか行動できていない 計画性がないと言われることが多いから／現状把握とこれからの見通しをもって計画できる力を身につけたいから／「自己管理できる学生」になりたいから 模倣は得意だが、生み出すことを苦手としてきたため／発想力が豊かではないから／誰も思いつかない私らしいアイデアを生み出していけるようになりたいから
	計画力	5		
	創造力	4		
チームワーク	発信力	9	36.4	人前で堂々と自分の意見を話すことが苦手だから／相手にわかりやすく物事を伝えることが苦手だから／この力は就職活動でとても重要だから／まずはこの力がコミュニケーション力の向上につながるから * 自分がこうしたいという気持ちが固まると、周りが見えなくなってしまうことがあるから／もっと他の人の意見を尊重できるようになりたい 自分のできることは他人もできると思い込み、行動を進めてしまうことがあるから／後期の授業のチーム活動で、この力が不足して消化不良に終わったから * 何かに悩むと誰にも相談できず、ずっと引きずってしまうから／日頃ストレスを溜め込みがちなので、他学科の人と触れ合える今、自己制御力を向上させたい
	傾聴力	0		
	柔軟性	2		
	状況把握力	3		
	規律性	0		
	ストレスコントロール力	2		

(人) (96)

(一部抜粋)

表11 自己評価および関連した活動

領域	能力要素	人数	評価	関連した活動〔企画〕	関連した活動〔日常〕
アクション	主体性	6	1.94	美術館ツアーで事前学習に向けてアイデアを出しあったり、当日は司会をやりきった／ツアー当日はできるだけ参加者を気にかけて、周りを見て自ら動けた／表彰式を取り仕切り、自分のアイデアが形になる喜びを実感できた	所属できたことが何よりの成長／これまで自分には向いていないと思っていたことでもやることができるとわかった
	働きかけ力	8		プロフェッサー・トークの司会では、2人で事前の打ち合わせをたくさんできた／SNSでの広報活動ではチームの士気を高めることができた	1期生だからこそ実感できる計画的な助言ができた
	実行力	3		学科ツアーでは積極的にやりたいことを提案し人前に立つことの緊張も克服できた	リーダー不在時に自ら進んで代理の業務ができた
シンキング	課題発見力	2	1.91	地元サッカー選手を招いてのイベントでは、みんなで協力して課題をひとつずつ解決していくことで視野が広がった	*
	計画力	5		美術館ツアーの展示活動では計画段階から熱心に取り組み、その後の成果発表まで企画全体を見通す力がついた	*
	創造力	4		選書企画を通して、自分の頭の中にあった「想像」が「創造」されていく過程を見て達成感と充実感と感謝がこみ上げてきた	*
チームワーク	発信力	9	2.03	事前に話す内容をしっかりと決めてイベント司会に臨めた／企画展示では積極的にアイデアを出せたこと	メンバーの気持ちに寄り添って見守ること
	傾聴力	0		*	*
	柔軟性	2		企画展示のものづくり場面で、周りのメンバーのアイデアを取り入れたこと	チームの人間関係で時には静観することも必要だと学んだこと
	状況把握力	3		フェスの準備・計画を通していろいろなチームのリーサプと関わりを広げられた／他チームの状況をよく観察できた	*
	規律性	0		*	*
	ストレスコントロール力	2		チーム合同の企画では、スケジュールを調整して情報共有に努めたことでストレスが少なくなった	いつも誰かと話すことでストレスを溜め込むことが少なかった

(人) (点)

(n=37)

(n=7)

#### 4. 考察

活動前の目標設定では、【発信力】【働きかけ力】【主体性】を重要視する学生が多く、その選択理由として、自身に不足しているという現状認識と社会に出てから特に必要とされる力であるという危機感が多く挙げられていた。これらの結果から、チームやスタッフ全体の組織、関係構築を前提としたなかで、積極性を発揮し、チームに貢献していきたいという成長志向が確認できた。

また、活動後の振り返りでは、各チームで企画の立案から実行までをやり遂げた自主イベントや合同イベントを挙げた学生が多く、〔企画〕の記述では、課題遂行のために司会を担当したことや協力して「ものづくり」をした体験など対課題意識における自己成長に焦点が当てられ、〔日常〕の記述では、課題遂行の基盤となるスタッフ同士の良好な人間関係構築に焦点が当てられていた。これらの結果から、ラーニングコモンズの活動実践は、他者との関係における社会的成長および人格的成長を促進する一定の効果があったことが示唆された。

### 総合的考察と今後の課題

社会人基礎力に影響を与えると考えられる活動経験について、天川（2015）<sup>13)</sup>は、学内外での活動をバランスよく行い、良好なコミュニケーションのもとで人間関係を構築しながら役割を果たしていくという一連の活動が仕事でも共通して求められているとし、「アルバイト、ボランティア、クラブ・サークル活動、ゼミ」の4つの活動経験が、組織における期待役割、発揮行動を考える最適な場であると指摘している。

このように汎用的能力と正課外活動経験との関連に焦点をあてた多くの研究では、その効果や可能性を高く評価しているが、本研究1において、5つの課外活動経験の有無による社会人基礎力得点の差は、いずれも見られなかった。その理由として、①ラーニングコモンズにおける活動実践そのものが、学生スタッフの社会人基礎力の向上に影響を与えていたこと、②一般的に集団における協調性や共同体感覚が高い傾向にあるとされる女子学生のみを対象にしていること、③活動経験の有無のみの調査であったことの3点が挙げられる。

学生スタッフには参加の時点から自己成長欲求の高い学生が多く、いわゆるハイパーフォーマーの学生が多く在籍している。しかし、アンケート調査の記述にもみられるように、対人関係で躓き、「これまでの弱い自分を変えたい」という学生や「チームに所属できたことが何よりの成長」と実感している学生もいる。学科学年も異なる学生たちが、ひとつのチームを構成することは容易なことではない。まずは安心できる活動拠点があり、チームに所属しているというコミュニティ感覚が醸成されること、その中で自らが果たすべき役割を見つけられているということ、そして良好な人間関係を構築していく過程のなかで、チームのミッション達成のためにどう行動していくべきかを各自が考え、自己成長へと繋げていく仕組みこそがラーニングコモンズに求められている活動の在り方ではないだろうか。こうした成長の仕組みを、Alderfer（1972）のERG理論<sup>14)</sup>をもとに3段階のレベルに分けて整理したのが図1である。

ERG理論は、存在（Existence）、関係性（Relatedness）、成長（Growth）の3つのレベルから組織環境における人間のモチベーションを整理した理論である。この理論は、Maslowの欲求段階説と共通する概念が多いが、大きく異なるのは、低次から高次欲求が同時に存在しうる点と、高次欲求が満たしにくい場合には低次欲求をさらに満たそうとする点である。つまり、学生個々の成長課題・欲求レベルの志向性に応じて達成感や満足感が得られるのである。研究2におけるアンケート調査では、この3つのレベルすべてに関する記述が認められた。今後、ラーニングコモンズにおける活動をより発展させていくためには、それぞれの学生の課題に応じた支援、モチベーションの維持・向上を図るための仕掛けが必要であろう。

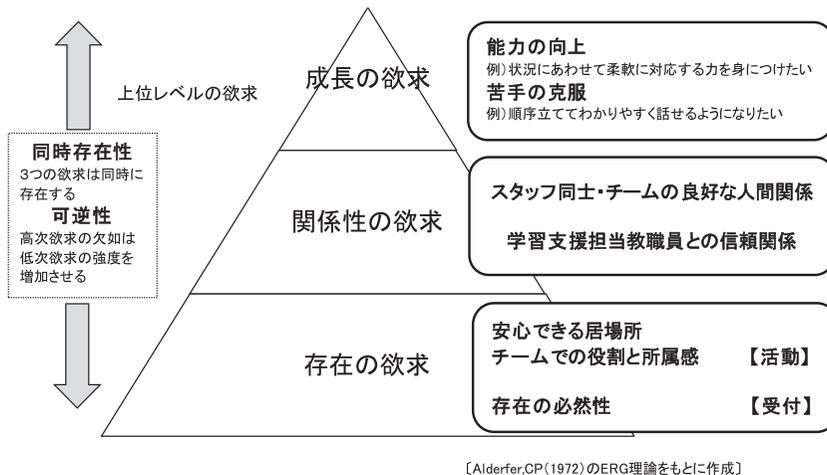


図1 ラーニングコモンズにおける学生スタッフの成長モデル

これらの正課外活動は学力の三要素にも影響を与えるものであり、思考力・判断力・表現力といったリテラシーや、主体性・多様性・協働性といったコンピテンシーに代表される、いわゆる氷山の下での「見えにくい学力」との関連も指摘されている。また、正課外活動における実践知、そこでの学生の学びや汎用的能力の測定に関しては、まだ発展途上である。より詳細に検討するためには、課外活動経験の有無だけでなく、それぞれの活動経験年数や参加度合などを点数化した指標が必要になるであろう。また、並行して学生のソーシャルサポートや自尊心、共同体感覚などを含め、汎用的能力を総合的に可視化したうえで、学生の成長を促す効果的なアプローチを探っていくことが課題である。

#### 〔付記〕

本研究の一部は、日本リメディアル教育学会第13回全国大会<sup>15)</sup> および第14回全国大会<sup>16)</sup> において発表された。また、「平成30年度安田女子大学学術研究助成」において、研究課題「学生の社会人基礎力向上に寄与する学習支援担当職の行動特性に関する研究」としての研究費を受け、その成果を一部公表するものである。

#### 〔謝辞〕

本研究にご協力いただいた学生スタッフの皆様には感謝申し上げます。また、本論文の査読過程において、諸先生方から多くの重要なご指摘・ご教授を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

1. 経済産業省 (2006) 社会人基礎力に関する研究会「中間取りまとめ」
2. マーチン・トロウ/天野郁夫・喜多村和之 訳 (1976) 高学歴社会の大学—エリートからマスへ 東京大学出版会.

3. 文部科学省 (2017) 平成29年度 学校基本調査 (確定値) の公表について
4. 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 日本の将来推計人口平成29年推計 人口問題研究資料、第336号.
5. 松下佳代 (2010) 〈新しい能力〉は教育を変えるかー学力・リテラシー・コンピテンシー ミネルヴァ書房.
6. 日本私立大学連盟 (2015) これからの私立大学のあり方に関する提言 インテリジェンスセンター政策研究部門会議.
7. 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討ー正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示すー 京都大学高等教育研究、15、107-118.  
山田剛史・森 朋子 (2010) 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割 日本教育工学会論文誌、34 (1)、13-21.
8. 山田一隆・井上泰夫 (2009) ボランティア活動を通じた学生の「学び」のイメージー2007年度立命館大学学生意識調査を事例として 立命館人間科学研究、19、59-75.
9. 文部科学省 (2018) 平成29年度学術情報基盤実態調査 大学図書館編.
10. 経済産業省・河合塾 (2010) 社会人基礎力育成の手引きー日本の将来を託す若者を育てるために 朝日新聞出版.
11. 山田貴子・金山健一 (2017) ラーニングコモンズの活動が大学生の社会人基礎力に与える効果の検討. 神戸親和女子大学大学院研究紀要、13、63-74.
12. 北島洋子・細田泰子・星 和美 (2011) 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討 大阪府立大学看護学部紀要、17 (1)、13-23.
13. 天川勝志 (2015) 大学生に求められる就業基礎力に関する考察ー産業構造の変化に伴う人材採用・育成戦略と関連してー 成蹊大学一般研究報告、49 (3) .
14. Alderfer, CP (1972) Existence, Relatedness, and Growth: Human Needs in Organizational setting. Free Press, New York.
15. 山田貴子 (2017) 教職学協働運営のラーニングコモンズにおける授業外学習支援ー学生スタッフの学びと成長の検討ー 日本リメディアル教育学会第13回全国大会発表予稿集、54-55.
16. 山田貴子 (2018) ラーニングコモンズの協働運営に参画する学生スタッフの行動特性ー学生が課外活動に求める学び・成長とはー 日本リメディアル教育学会第14回全国大会発表予稿集、60-61.

[2018. 9. 27 受理]

コントリビューター：折本 浩一 教授 (国際観光ビジネス学科)

